

医学教育カリキュラム評価のための 科目アンケート実施方法の確立

■ 関 安孝（医療人育成支援センター 医学教育 IR 室）

■ 山下 竜右（医療人育成支援センター 医学教育 IR 室）

■ 畠山 豊（医療人育成支援センター 医学教育 IR 室）

目的

医学教育分野別認証評価基準の中でこれまで日本では実施されてこなかったのがカリキュラム評価である。継続的な内部質保証のためには、絶えずカリキュラムを評価し、改善策を立案して実行し、改めて評価を行う、PDCA サイクルの確立が不可欠である。このカリキュラム評価の基礎となるデータは医学生や教員、その他のステークホルダーからのアンケート等によるフィードバックである。このため本医学部は、平成29年5月に IR（Institutional Research）専門の部局として「医学教育 IR 室」を医療人育成支援センター内に設置した。分野別認証評価のためのアンケートデータの収集、管理、分析はこの医学教育 IR 室が担当する。

医学教育 IR 室では SQL サーバ上にデータベースを構築し、入試・学務・成績及び卒業時データに対して網羅的な統計分析を実現している。またこれに、アンケート結果を紐付けして分析するために、紙ベースから、web ベースの moodle を利用したアンケートの実施への転換を進めている。カリキュラム評価に対応するためには、学生、卒業生および教員を対象に、開講科目の全てを網羅する、長期間（少なくとも10年以上）にわたるアンケート調査が必要である。このような大規模アンケートを web ベースで実施した場合、

アンケート項目の増大やそれに伴う回答率の低下などが懸念される。また、アンケートの設定や分析、科目責任者へのフィードバック資料の作成をする教職員の仕事量も膨大になると予想される。

そこで、平成30年度前期に医学科1年生を対象に科目アンケートのトライアルを実施した。このトライアルは、

- ① 高い回答率を実現できるか。
- ② 学生の負担を軽減できるか。
- ③ カリキュラム改善のデータを得られるか。

の3点を検証することを目的とする。特に②と③は、相反する目的でありそのバランスが難しいと予測される。更に、このトライアルを実施するに当たり、moodle のアンケート設定とフィードバック資料の自動生成プログラムを外部業者を利用して作成した。このプログラムは、平成30年度教育研究活性化事業（事業名称「医学教育カリキュラム評価のためのアンケート収集・管理・分析システムの構築」）により資金的サポートを得て開発したものである。このプログラムを利用することにより教職員の業務を低減し、継続的な実施が可能となった。

アンケート実施要領

平成30年度に医学科1年生である110名を対象に科目アンケートトライアル（表1）を実施した。なお、このアンケートを実施するに当たり、在学中有効な個人情報同意書を事前に得たうえで、アンケートは記名式とした。それに伴い、一定期間が経過したあとにアンケート未実施の学生に対し、リマインドメールを送信した。

表1 科目アンケートトライアルの実施状況

項目	内容
開始日時	平成30年8月8日(水) 13:00
終了時刻	平成30年8月31日(金) 23:55
リマインドメール	平成30年8月16日(木) 14:00
質問数	172
回答数 / 対象者	91 / 110 人
回答率	83%
実施方法	医学部 moodle のアンケート機能

アンケート内容

アンケートは、科目に関する網羅的な情報の取得と学生の負担軽減という相反する目的をバランスよく実現するために、全体の満足度（0～10の評定尺度）から深掘りする方法を用いた。具体的には、医学科1年生前期開講科目を4つのカテゴリー、すなわち「初年次科目」、「専門科目」、「教養科目（岡豊）」、「教養科目（朝倉）」に分類し、冒頭でカテゴリーの満足度（S）を質問した後、「満足度（S）の要因となった科目はどれですか？」と「不満足（10-S）の要因となった科目はどれですか？」という質問をチェックボックス（複数選択）形式で質問をした。webのアンケートフォームを図1に示す。その後、満足度又は不満足度の要因として選択した科目に関して、その夫々の理由を複数選択形式で質問した。このような形式にすることで、良くも悪くも印象に残っていない科目の回答を省くことで、学生の負担を軽減できると考えられる。但し、この方法だと各科目に対するフィードバックを十分に得

られるかどうかはわからない。この点に関しては後で詳しく分析結果を示す。

図1 アンケートフォーム
(満足度とその理由科目の選択)

結果

表1に示すように、110名中91名の学生がアンケートに回答した。回答率は83%であり、実施方法がwebであること、更に授業中に回答時間を設定していないことを考えると、とても高い回答率であった。この理由の1つはリマインドメールにあると考えられる。図2にアンケート実施日と回答者数の関係を示す。8月16日に個別に送ったリマインドメールの後に回答した学生が35名と多いことがわかる。また、最終日に実施する学生も7名いた。このように、webを使ったアンケートであっても、未実施の学生に適切なタイミングでリマインドメールを個別に送ることで、高い回答率を実現できることがわかった。

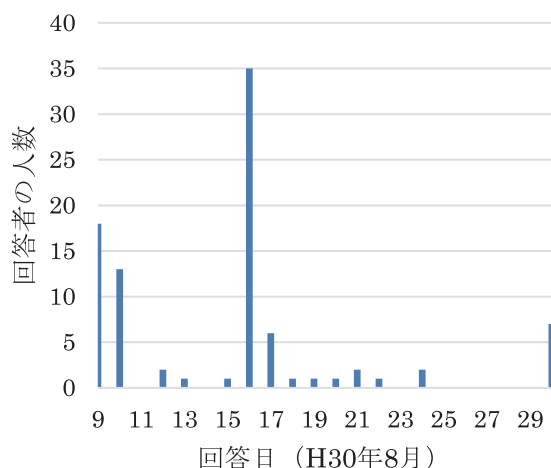


図2 アンケート実施日と回答者数

次に、学生の負担を調べるために、回答項目数の頻度を調べた。結果を図3に示す。全項目数が172であるのに対し、実際に回答した項目の最大数は37、最小数は6、平均数は22.6であった。このように学生に全てを必須として回答させた場合に比べ、平均数は13%であり、明確に学生の負担を軽減できた。

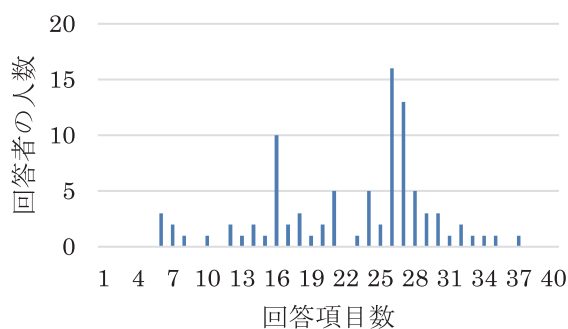


図3 回答項目数

最後に、アンケート結果にカリキュラム改善に有用な情報が含まれているかどうかを調べるために、満足度あるいは不満足度の要因として科目名を選択した学生の割合を調べた。結果を図4に示す。初年次科目や専門科目に関しては、満足度の要因に科目名を選んだ学生はそれぞれ89%、90%であった。また、不満足度の要因では71%、70%であった。またここでは示さないが、各科目に対する良かった点、改善点が多数回答さ

れている。このように各科目の改善やカリキュラム評価の議論のもととなるデータとして十分な情報が得られた。これに対し、教養科目に関してはとくに不満足度の回答率が比較的低いが、これは学生の科目に対するモチベーションと関係するかもしれない。

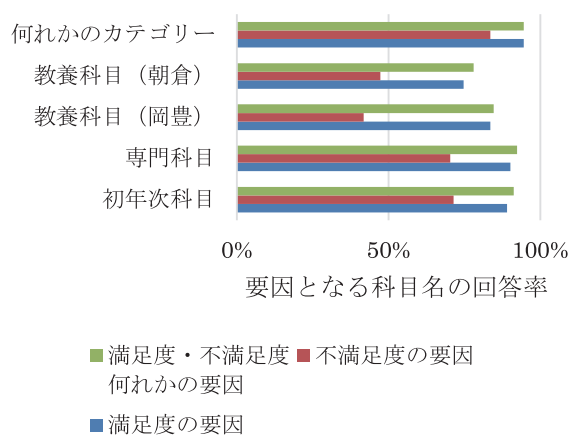


図4 満足度・不満足度の要因科目名の回答率

結論

今回の科目アンケートトライアルの方法は、カリキュラム改善に有用なデータが得られることがわかった。高い回答率、学生の負担軽減、全科目に対する学生の意見がバランスよく収集できた。

また今回のトライアルでは、今後、実施学年を増やし、前期・後期を通して継続的にアンケートを実施する上での問題点があることもわかった。それは、アンケート実施のタイミングが難しいことである。当然、各科目の試験などと重なると学生はアンケートに応じてくれない。また、その状態がしばらく続けば、アンケートの存在そのものを忘れてしまうだろう。今回リマインドメールによって、ある程度思い出させることに成功したが、実施学年が増えるに従い、学生の試験などの状況を把握することが困難になるだろう。クラス委員や医学教育学生会 BRIDGE など、協力してくれる学生と共同して適切な時期を策定する必要がある。